



前駐日ドイツ大使 Volker Stanzel 氏特集記事

前駐日ドイツ大使、Volker Stanzel 氏が今年4月、ドイツのフランクフルター・アルゲマイネ紙に発表された特集記事は日中両国の歴史・外交関係を、日本、中国の両国大使を経験された立場から、詳細に分析、研究されており、私たちにとっても大変示唆に富んだ内容の論文です。このたび Stanzel 氏の御了解を得て、その全文を独日両文で Der Hafen に連載（3回）いたします。

フランクフルター・アルゲマイネ紙
2014年4月7日付

「陽は昇り、陽は沈む」

日中両国において、両国の戦争を予見する人々が多い。紛争の焦点は東シナ海の諸島だが、その後には、両国ともに二千年にわたる優越感、屈辱、報復、そして民族の尊厳をめぐる闘争の歴史がある。フォルカー・シュタンツェル博士



シュタンツェル博士の近影(5月30日)
Dusseldorf, Japan Center 前

中国においても日本においても、日中間の戦争を予見する大衆文学が様々に存在する。そこでは、第一次世界大戦直前 1914 年頃のヨーロッパの状況との類型が示されることが多い。また昨年、英国の歴史学者クリストファー・クラークは第一次大戦前の状況を、欧州各国の首脳が「夢遊病者のように」災厄に突っ込んでいった、と描写した。状況を見守るヨーロッパ人にとっても、現在の日中関係と 1914 年との類似性はそこできいよ歴然としたのである。(P2へ)

アンゲラ・メルケルのドイツ (中)



横浜日独協会会長 早瀬 勇

〔前号(上)の(3)“脱原発への政策転換は政治的判断”の続きです〕
福島第一原発の大惨事は、ドイツ国民の脳裏にチェルノブイリの恐怖を甦らせました。直ちに成田空港にルフトハンザの大型機が飛来し、在日ドイツ人家族を祖国に脱出させ、大使館機能を大阪に移しました。

野党「緑の党」が勢いづいたのは当然で、メルケル首相は断崖に立たされました。急遽「10年以内の原発全廃」という原子力倫理委員会(原発関係者を除く歴史家、宗教家、倫理学者ら17名で構成)の答申を受け、5月30日「脱原発」の前倒しを決断したのでした。これによって与党CDUは、環境分野での野党の独走を阻止し、昨年の総選挙で確固とした地歩を固めたのです。素早く空気を読んで政策変更や撤退(Ausstieg)を決断するのは見事です。

(4) 代替エネルギーの問題は容易ではありません

太陽光が少ないドイツで、太陽光発電を採算に乗せるのは至難です。アジアからの安価なパネルはドイツ中に溢れていますが、政府が設定した買い取り価格が高すぎて電力料金が上がり、代替エネルギーそのものに対する国民の疑念を増幅しています。

現地を取材し、科学者・経営者らの見解を質した限りでは、①天候に左右されないバイオマス発電の普及、②南北送電網の早期完成=電力融通、③パッシヴハウス(省エネ)での国民的節電運動によって、原発分の落ち込みはカバーできると期待されます。メルケル首相の福島直後の変身(Ausstieg)が吉と出ることを祈っています。

(5) 還暦を迎えた“現実主義”宰相への評価は高まる

去る7月17日に60歳となり、FAZ紙にも「女性・青年相に就任以来、多くを学び、うまくやって来られた」と自信を隠していません。

今やドイツ一国でなくEU各国首脳の意見を集約する立場のメルケル首相は、このところ慎重さが目立っています。以前の徴兵制支持からの後退(Ausstieg)をはじめ、ウクライナ問題での当初の控え目な言動などで、EUや米ロへの影響を考えると、これは反対派が綽名するような“ためらう女(Zauderin)”というよりは慎重さを評価すべきで、各国の思惑が透けて見えてくるまで観察する物理学者首相の賢さの表れでしょう。旧東独出身ですが、彼女の辞書に「歴史的必然」(マルクス)は無いのです。(了)

(次号掲載の(下)は、(6)国防意識と武器輸出、(7)なぜ訪中7回、来日1回なのか? を掲載の予定です。)以上



DJW(独日産業会議)
ヴィースホイ会長ご夫妻と早瀬会長。
本年6月6日、フランクフルト郊外にて

「陽は昇り、陽は沈む」 (P 1から続く)

日中関係には三つの現象が特徴的であるが、それらはことごとく、民族の自尊心、尊厳、傷つきやすさ、屈辱と関係している。もともと中国の歴史の殆どの 時期において、日本は自国の視野の外に位置する、どうでもよい島々 でしかなかった。しかし日本にとっては、二千年以上にわたり、中国が本質的な文化の尺度であった。その後 19 世紀には日本が近代化を進め、アジアの強国として中国に対し、それ以前は欧州諸国 にしか可能でなかったようなやり方で、二度の戦争をもって屈辱を与えた。その後日本には 1980 年から 1990 年までの間、来るべき世界の「ナンバー・ワン」と見なされていた時代があり、中国 は 1990 年以来、貧困に喘ぐ共産主義の大帝国から、世界経済の ナンバー・ツーにのし上った。1978 年に日中が国交を正常化して以来 (訳注: 国交正常化は 1972 年、1978 年には日中平和 友好条約締結)、二国間関係が着々と悪化してきた事実は、ここに 特殊な問題が存在することを示すに他ならない。しかし、だからといって本当に 戦争にまで至るのであるか?

過去二千年の間、日中の兵が交戦したことは 5 回しかない。それは 日本が島国であること、また中国はどの王朝も大陸志向であったことに起因する。しかし、日中関係の初期にはすでに喜ばしからぬ言 葉が使われていた。中国の史書には、西暦 57 年の両国間の交流が 初めて記録されている。その際には、帝が「倭」の王に印を授け、 臣下にあることを示した。「倭」とは「矮小」な国、日本である。この蔑称は、現代の中国人が「小日本人」あるいは「小日本」について語るとき に今なお残響として聞こえる。

7 世紀から 9 世紀まで、中国は、日本を含む東アジア全体にとって 文明の手本であった。文字、仏教、儒教的国家制度、法制度、建築、 芸術、音楽、すべては中国から受け継いだ。交易を行い、相互に訪問しあった。しかし中国が膨張政策を取った時期に、文化的侵攻がいずれ軍事的侵攻になり得るという意識が日本で高まった。その頃、日本では「帝」の概念を「天皇」として中国語から取り入れ、この天皇を、中国の帝と同列に置いた。「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。

あまりに大きな隣国に対する、自己確認の行為であった。

日本への最初の侵攻は 1274 年と 1281 年に元朝下で行われた。おそらくは、日本が黄金に満ちた国であるとの評判にそそられてのことであっただろう。蒙古襲来は阻止されたが、脅威の認識は残った。幕府は、その後 150 年に渡り自らを中国の「封臣」と呼ぶ ことにより対処する。この、政治的にはおそらく正しかった「封臣」の身分はまた、日本は独特、特別であるとの意識の形成につなが

Auf- und Untergang der Sonne

In Japan und in China sehen viele einen Krieg zwischen ihren Ländern kommen. In dem Konflikt geht es um eine Gruppe von Inseln im Ostchinesischen Meer, doch dahinter steht auf beiden Seiten eine zweitausend Jahre alte Geschichte von Überlegenheitsgefühl und Demütigung, von Revanche und vom Ringen um nationale Würde.

Von Dr. Volker Stanzel

In China wie in Japan gibt es eine umfangreiche Populärliteratur, die einen Krieg zwischen beiden Mächten kommen sieht. Oft werden dabei Parallelen zur Lage in Europa vor dem Beginn des Ersten Weltkriegs.

1914 gezogen. Europäischen Beobachtern scheinen Analogien des gegenwärtigen japanisch-chinesischen Verhältnisses zu 1914 spätestens seit dem vergangenen Jahr augenfällig: In einer Darstellung der Vorgeschichte des Ersten Weltkriegs sah der britische Historiker Christopher Clark die Führer der Länder Europas „schlafwandelnd“ ins Unheil marschieren.

Drei Phänomene kennzeichnen die chinesisch-japanischen Beziehungen. Alle haben sie mit dem Selbstwertgefühl von Völkern, mit Würde, Verletzlichkeit und Demütigung zu tun. So war Japan für China die längste Zeit eine Handvoll belangloser Inseln fast jenseits des eigenen Horizonts. Für Japan dagegen war China mehr als zweitausend Jahre lang der wesentliche kulturelle Bezugspunkt. Im 19. Jahrhundert nahm Japan seine Modernisierung in Angriff und demütigte als asiatische Macht China in zwei Kriegen so, wie es bis dahin nur die Europäer vermocht hatten.

Schließlich galt Japan zwischen 1980 und 1990 als künftige “Nummer eins“ in der Welt, während China seit 1990 von einem verarmten kommunistischen Großreich zur Wirtschaftsmacht Nummer zwei in derWelt aufstieg. So ist es gewiss Zeichen einer besonderen Problematik, dass sich seit der Aufnahme diplomatischer Beziehungen zwischen beiden Staaten im Jahr 1978 das bilaterale Verhältnis Schritt für Schritt verschlechtert hat. Aber kann das bis zum Krieg führen?

Im Laufe der vergangenen zweitausend Jahre standen sich japanische und chinesische Soldaten nur fünfmal gegenüber –eine Folge der Insellage Japans und der Kontinentalorientierung sämtlicher chinesischer Reiche. Doch schon am Anfang steht ein unglückliches Wort: Über den ersten schriftlich festgehaltenen Kontakt heißt es in chinesischen Chroniken im Jahr 57 nach Christus, dass der Kaiser einemKönig im Lande „Wo“ ein Siegel übersandte, das dessen Vasallenstatus bezeichnen sollte. “Wo“ ist das Land der “Zwerge“–Japan. Diese abschätzige Bezeichnung klingt noch heute nach, wenn Chinesen von den „kleinen Japanern“ oder dem „kleinen Japan“ sprechen. Vom siebten bis neunten Jahrhundert war China für Japan wie für ganz Ostasien zivilisatorisches Vorbild. Man übernahm Schrift, Buddhismus, das konfuzianische Staats- und Rechtswesen, Architektur, Kunst und Musik. Man trieb Handel und besuchte sich wechselseitig. Dass aus der kulturellen Invasion einemilitärische werden könnte, wurde Japan damals während einer Phase kriegerischer Expansion Chinas bewusst. Zu dieser Zeit übernahm Japan den Begriff für Kaiser – “Tenno“ – aus dem Chinesischen und stellte den „Tenno“ auf eine Ebene mit dem Kaiser von China: “Der Kaiser

った。神話によれば日本の天皇家の起源は 神々であることとされ、また建国以来一系の支配者であったことにより、しばしば王朝の変わる 中国に比して日本が優れており、世界でも優位に立つという意識の 根拠となったとは言えまいか？中国はもはや手本でも脅威でもなく、いざとなれば勝算さえあるように見えたのである。そうして 16 世紀に朝鮮半島の地で初めて中国征服の試み がなされたが、これを中国は阻止した。しかしその後も、日本は特別であるという理念は、 19 世紀、それまでの中国とは比べ物にならないほど大きな脅威であった西洋の植民地主義を前に、日本の 精神的な頼みの綱となった。これによってこそ日本は、自尊心を揺るがされることなく徹底的な近代化を 推し進めることができたのである。

19 世紀後半、日本は近代化の立ち遅れを挽回することにより、帝 国主義的發展の遅れも成功裏に取り戻した。1873 年、ビスマルクは日本政府使節団と夕食を共にし、その席におけるスピーチで、ドイツや日本のような「小さな国々」が台頭するにあたっては、国 際法にとらわれてはならない、と述べたのである。国際法などというものは、列強による抑圧の手段に過ぎない、と。果たして日本は、 植民地主義の実現にあたりこの助言に従い、さらに、妨げのない交易と天然資源へのアクセスによって繁栄 が担保されるという、西洋モデルのロジックにも従った。ここで第一の犠牲となったのは朝鮮である。日本は 1876 年、それより 20 年前に米国が日本の開国を迫ったのと同じやり方で、朝鮮に開国を強いた。

1894 年、95 年には、朝鮮における影響力をめぐる中国との戦 争に日本が勝利する。これにより、日本は朝鮮を支配し、満州への 道を固めたのみならず、台湾を手中におさめた。中国は、巨額の賠償金を支払い、港湾を開かなければならなくなった。中国は、この 屈辱を与えたのが同じアジアの一国であったことにより、とりわけ 強く打ちめされた。1792 年に英国大使が訪中して以来、中国は百年にわたり、なんとか西洋の攻勢に立ち向かうための手段を模 索してきたのである。知識人や政治家は、中国を「豊かで強く」する という「中国の夢」をしばしば掲げてきたが、それは常に、旧態 依然とした支配構造と文化的優越感に阻まれて成功しなかった。し かし日清戦争に敗れた時、明治時代の日本がモデルとなり得るよう に見えたのである。そこで 1898 年、中国政府は日本から、か つて対中国で勝利した当時の首相を招聘し、改革を率いる顧問の座を 提供しようとした。しかしこの試みも、保守勢力により芽が出る前に息の根を止められることになる。(以下次号へ続く)



「中国式プロパガンダ：敵を憎悪せよ。防衛設備を着々と構築せよ。堡壘を強化せよ。敵を壊滅させよ。(1937 年頃)」
(注：新聞に使われたイラスト)

des Landes der aufgehenden Sonne grüßt den Kaiser des Landes der untergehenden Sonne.“ Ein Akt der Selbstvergewisserung gegenüber dem übermächtigen Nachbarn. Zu ersten Invasionsversuchen kam es in den Jahren 1274 und 1281 unter der Mongolen-Dynastie. Angelockt wurden die Chinesen vermutlich vom Ruf Japans, ein goldreiches Land zu sein. Die Angreifer konnten abgewehrt werden, hinterließen aber ein Gefühl der Bedrohung. Die Samurai-Herrscher reagierten, indem sie sich 150 Jahre lang “Vasallen“ Chinas nannten. Dieses vielleicht politisch kluge “Vasallentum“ führte zur Entwicklung der Vorstellung, Japan sei einzigartig: Da die japanische Tenno-Dynastie dem Mythos nach göttlichen Ursprungs war und seit der Gründung des Landes stets im Besitz des Thrones, musste dies nicht Überlegenheit über China mit seinen oft wechselnden Dynastien bedeuten und den Vorzugsstatus Japans in der Welt begründen? China schien nicht mehr Vorbild oder Bedrohung, sondern besiegtbar. Einen ersten Eroberungsversuch im 16. Jahrhundert wehrte China auf koreanischem Boden ab. Der Gedanke der Einzigartigkeit Japans wurde im 19. Jahrhundert, als der westliche Kolonialismus zu einer größeren Bedrohung wurde, als es China je gewesen war, zum geistigen Rettungsanker Japans: Er ermöglichte die rückhaltlose Modernisierung Japans, ohne dass Zweifel am eigenen Selbstwert aufgekommen wären. Die nachholende Modernisierung in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts mündete sehr bald in einen ebenso erfolgreichen nachholenden Imperialismus. Während eines Abendessens für eine japanische Regierungsdelegation im Jahr 1873 legte Bismarck in einer Tischrede dar, dass „kleine Staaten“ wie Deutschland und Japan sich bei ihrem Aufstieg nicht vom Völkerrecht fesseln lassen dürften. Dieses sei nicht mehr als ein Unterdrückungsinstrument der Großmächte. Der japanische Kolonialismus folgte diesem Rat ebenso wie der Logik des westlichen Modells: Wohlstand ließ sich nur durch ungehinderten Handel und durch Zugang zu Naturschätzen gewährleisten.

Das erste Opfer war Korea. Japan zwang es im Jahr 1876 in der gleichen Weise zur Öffnung, wie dies zwanzig Jahre zuvor die Amerikaner mit Japan gemacht hatten. In den Jahren 1894/95 siegte Japan in einem Krieg um den Einfluss in Korea über China. Damit sicherte sich Japan nicht nur den Zugriff auf Korea und den Weg in die Mandschurei, sondern auch den Besitz Taiwans. China musste hohe Reparationen leisten und die Häfen öffnen. Diese Demütigung traf China besonders hart, weil sie durch eine andere asiatische Macht erfolgte. Seit dem ersten Besuch eines britischen Botschafters im Jahr 1792 hatte China ein Jahrhundert lang vergeblich nach einem Rezept gesucht, um dem westlichen Vormachtstreben zu begegnen. Der von einigen Intellektuellen und Politikern propagierte “chinesische Traum“, das Land “reich und stark“ zu machen, scheiterte immer wieder an verkrusteten Herrschaftsstrukturen und an kulturellem Überlegenheitsgefühl. Jetzt, nach dem verlorenen Krieg, schien Meiji-Japan Modell werden zu können. 1898 lud die chinesische Regierung einen früheren Regierungschef Japans ein – jenen, der China besiegt hatte. Man trug ihm den Posten eines Chefministers für Reformen an. Auch dieser Versuch wurde von konservativen Kräften im Keim erstickt.

講演「ベルリンオリンピックの証人」を聴いて
会員 寺澤行忠



2014年9月の例会で、大堀聰氏による講演「ベルリンオリンピックの証人」を拝聴させていただいた。

内容は、ベルリンオリンピックの記録映画「オリンピック」を取り上げ、そこに映っている情景を、大手精密写真機器メーカーに勤務される大堀氏らしい鋭い視点でよみ解き、人物の特定を試みられるとともに、ベルリンオリンピックやそれを取り巻く当時のベルリンの日本人社会の状況を明らかにされたものである。

ベルリンオリンピックは、第二次世界大戦の前夜ともいべき1936年に、ベルリンにおいてヒトラー率いるナチスドイツの手で行われた、特異な時代のスポーツの祭典であった。日本も249名の選手団を送り込み、前畑秀子、葉室鉄夫、田島直人らの活躍で6種目で金メダルを獲得した。

「オリンピック」は、女性映画監督リーフェンシュタールが、「民族の祭典」（陸上競技）、『美の祭典』（水泳など）の二部作として製作した同オリンピックの記録映画で、1938年に公開され、ベルリン映画祭で最高賞を受賞している。

大堀氏はこの映画に写っている日本人の特定をすすめ、特定できた中の一人、加藤綾子さんにインタビューするなどして、当時の状況を詳細に調査されたのである。

当時ベルリンには約300人の日本人がおり、それらは外交官、軍人、留学生などが主で、企業人は少なかった。この頃はまだメーカーが直接海外で自社製品を売り込む時代ではなく、三菱商事、三井物産、大倉商事などの大手商社が果たす役割が大きかった。それぞれの支店長、支店長夫人は、商売上の顧客のみならず、ベルリンを訪れる日本人を自宅でしばしばもてなし、また面倒をみたという。加藤綾子さんは、当時の大倉商事ベルリン支店長加藤鉦次郎氏の長女で、まだ小学生であったが、そうした状況を間近に見ていた。当時のベルリンの日本人社会にあっては、日本人会、日本人学校、日本食レストランが特に大切なものであったという。

ともあれ、オリンピックその他の映像写真の分析や当時を知る人々による証言をもとに、その頃の新聞記事なども参照しながら、大堀氏によって丹念に掘り起こされたこの時代の実像は、ベルリンオリンピックやドイツにおける戦前の日本人社会を知る貴重な手掛りとして、長く後世に伝えられることであろう。



大堀聰氏



「本物のドイツ式ビールが飲めますよ
——モトスミ・ブレイメン商店街で」

ブレイメン市の有名商店街ロイド・パッサージと姉妹関係にあるモトスミ・ブレイメン商店街では、今年10月からドイツの「ビール純粋令」に忠実に造られた本格的ビール「ブレイメンビア」を発売します。

去る9月14日、住吉神社境内でその本格ビールの試飲会が盛大に催され、横浜日独協会からも大谷、坂井（ご家族）、山田、早瀬各会員が参加して、よく冷えたピルスナー、ラオホ、ゴールデンエンジェルの三種類を賞味しました。当日は“ブレイメンビア！”の歌まで披露されて境内の雰囲気盛り上げました。



ビール純粋令による「ブレイメンビア」を披露するモトスミ・ブレイメン商店街伊藤博理事長（上）と祝辞を述べる早瀬会長（右下）

「ビールは麦芽、ホップ、水のみで造ること」（のちに酵母が加えられた）。バイエルンのヴィルヘルム4世が1516年に制定し、今も生きている「ビール純粋令」です。なるほど、このコクのあるビールを500年間も飲んできたからドイツ人は体ががっしりしていて（ご婦人も貫禄があつて？）、EUの中でも頑張っているわけですねえ。

ブレイメンビアはモトスミ・ブレイメン商店街を訪れるお客様だけが賞味出来るそうです。わが協会の法人会員モトスミ・ブレイメン商店街の発展に乾杯！日独交流の広がりプロースト！会員の健康を祈ってツム・ヴォール！（写真：大谷会員、文：早瀬勇

私のドイツでの思い出

<茶道のボランティア>

南雲淑子



1985年、主人の転勤に伴いデュッセルドルフに着くと、すぐ日本クラブのボランティアに茶道（華道）で登録しました。その時ミュンスターの大学の茶道の講座でデモンストレーションをして欲しいとの依頼を受け、60名ほどの学生さんにお茶を点て飲んで頂いたのが最初でした。正直60服もお茶を点てるのは大変でしたが、皆様に抹茶を味わって頂く喜びでー

杯でした。その時は通訳付きで、主人に車で連れて行ってもらいましたが、だんだんに自分で説明できるようになり、車の運転にも慣れて、気軽にどこでもボランティア出来るようになりました。その当時茶道はまだ珍しく、ほうれん草のようですねとか、お砂糖は入れないのですか？と言われたりしました。また、新聞社の取材を受け、プロの方に写真を撮って頂いたのは、良い思い出です。

日本に帰国してから約10年経った1998年に再びデュッセルドルフに赴任して参りましたら、日本文化全体が人気を博し、日本クラブには文化部が出来、日本デーなどの大きなイベントも始まりました。私もカールシュタット（デパート）で、デモンストレーション行い、フォルクスホッホシューレ（一般の方が学べる社会人学校）で茶道（華道）の講座を持ち、ドイツ婦人達にお作法をお教えする事が出来ました。この頃には、お抹茶はどこで買えますか？と聞かれる程、茶道が浸透してきている事を実感しました。

日本に帰国してからさらに2年経った2004年に3度目のデュッセルドルフ赴任となりました。すると、恵光ハウスと言う日本文化センターが出来、日本より移築した素晴らしいお茶室でお茶会が出来ようになりました。それまでは、緋毛せんとか、莫蔭を敷くことで雰囲気を出すようにして苦労していたので、大感激でした。でも恵光ハウスはいつでも使えるわけではないので、相変わらずドイツ人のお家や自宅（この時は社宅）での小さなお茶会はたびたびしており、皆様と親しく交われるとても楽しいものでした。日本に帰国してからも日本滞在のドイツ婦人達との交流の場（アム、ブルンネン）があり、秋には毎年着物を着せてさしあげてお茶会をしています。

Zwischen zwei Kulturen

Schuhgeschäfte 会員 大島レオナルド

今回は横浜日独協会会員の特別依頼で私の経験からドイツ・オーストリアでの靴の買い物の事を書きます。特に健康方面から話をさせていただきます。

一般に靴屋に行くと店員が最初にスケールで足の長さを計ってくれます。次は履き試しをし、店員が足の親指の位置を確認します。基本的には足の親指と靴の先の間に親指先一本ぐらいの空間が必要です。最後には店内で歩き回って、違和感が無ければ店員が勧めます。

もちろん、ヨーロッパは一日中靴を履いている文化なので生活のニーズに合わせた靴専門店もあります。例えば、ジョギング靴を買った時に友達に紹介されたお店がありました。その店ではいつもの通り足の大きさが計られましたが、次に裸足でランニングマシンを1分位歩かされました。歩き方をカメラで足の後ろ・前・上から録画し、店員が私の歩く癖を説明しました。歩き方とジョギングする地面（道路・草・等）により適切な靴の種類も変わるらしいです。当時買った靴は少し高価でしたが、今まだ使っています。

それから日本にあまり見られないのは子供の靴専門店ですね。子供の靴は特に健康的じゃないと、と言う印象はヨーロッパで強いです。靴により歩き方も変わって、骨の成長にも影響あり、最終的に背骨の成長や姿勢に関わりますので重要です。子供の時に母によくその専門店で連れていかれ、靴に中敷も入れられた覚えがあります。痛くて辛かったです。背中の問題はお蔭様で今までありません。

Auf Anfrage eines Vereinsmitglieds, werde ich dieses mal etwas über den Schuheinkauf in Deutschland und Österreich schreiben – besonders aus einem gesundheitlichen Aspekt.

In üblichen Schuhgeschäften misst ein Verkäufer am Anfang die Füße mit einem Fußmessgerät. Dann werden die Schuhe anprobiert, und die Lage der Zehen überprüft. Generell sollte vom Zeh bis zur Schuhspitze eine Daumenbreite Platz sein. Zuletzt spaziert man dann in den Schuhen im Geschäft etwas herum – lassen sie sich gut tragen, werden sie vom Verkäufer empfohlen.

Da Schuhe in Europa den ganzen Tag lang getragen werden, gibt es selbstverständlich spezialisierte Schuhgeschäfte. Zum Beispiel der Schuhladen, der mir von einem Freunden empfohlen wurde, als ich neue Joggingsschuhe kaufen wollte. Dort wurden mir wie üblich die Füße gemessen, jedoch wurde ich danach gebeten eine Minute lang barfuß auf einer Laufmaschine zu gehen. Meine Füße wurden dabei auf Kamera von hinten, vorne und oben aufgenommen, und mir meine Gangart daraufhin erklärt. Schuhe müssen wohl an die Gangart und dem Gelände (Asphalt, Wiese, usw.) angepasst werden. Die Schuhe die ich mir damals gekauft habe waren etwas teuer, jedoch verwende ich sie noch immer.

Auch Kinderschuhläden – die man in Japan kaum findet – fallen unter der Kategorie von spezialisierten Schuhgeschäften. Auf dem Gesundheitsaspekt von Kinderschuhen wird vor allem in Europa besonders Wert gelegt. Schuhe sind wichtig, da sie die Gangart beeinflussen, welches sich auf den Knochenwachstum und letztendlich auf die Entwicklung der Wirbelsäule auswirkt. Ich kann mich daran erinnern, dass meine Mutter mir als Kind immer spezielle Kinderschuhe mit Einlagen kaufte. Sie taten mir zwar höllisch Weh, ich hatte aber dafür nie Probleme mit meiner Wirbelsäule.

今夏の日本簿記学会（於：神戸大学）において、当会理事の戸田龍介先生が編著された著書『農業発展に向けた簿記の役割』中央経済社が、学会賞を受賞されました。



和やかな ”オクトーバーフェスト” に参加して 会員 齊藤進治



横浜山手にある会場「カントリー&アスレティッククラブ」では早瀬会長ご夫妻はじめ総勢31人の会員がそろってジョッキを傾けた。芝生の上のテーブルを囲んだ会員諸氏は思い思いのビールを手にプレッセルやローストチキンを肴に“Zum Wohl!”でドイツの雰囲気は満点。ジョッキを合わせると不思議に会話は”duzen”（*親称 du で呼び合うこと）、日本語なのに何故か間もなく”異国”の香りを醸し出す。どこか日本（横浜）なのに異国の地のような雰囲気の会場は、一見広いようで狭いこの世界、狭いようで広い人との出会いの場でもあった。

オクトーバーフェストには私は初めての参加だった。少しそれぞれのドイツとのつながりを話していたところ、私のお隣の方々は、日独協会の新会員だが、隣に座った方とは同じ大学の先輩（医師）と後輩（銀行マン）だったとわかり、旧知の仲の偶然の出会いのような場面があった。お向かいのご夫婦は日本の女性と北ドイツ出身の男性が羽田空港で知り合い、その4年後には結婚、というまさに電撃的シーンを地で行く。奥様はNHKBS テレビのZDF “Nachricht Heute”（*BSのニュース番組）の日本語通訳として今日も活躍しておられる。

会場に設けられた舞台ではチロル地方の音楽が奏でられ、参加者を出演者に仕立てる。ドイツに伝わるもので、手足を使った振り付けをして踊っているかと思えば、肩に手をかけ長い列になってテーブル間を練り歩く。10人が20人に、やがて30人と出演者が増えていく。ビール早飲み競争をしたり、アルプホルン吹きのチャレンジ、あるいは腕を組んでステップを踏みグルグルと回りさらに酔いをまわしてくれる。

“出演者も観客”も一緒になって会場全体を盛り上げていく。

私のように40年近くドイツの或る家庭とは家族同士のような親戚付き合いをしているかと思えば、何度も仕事でドイツに滞在したが最後の滞在を機につなかりがまったくないという方もいた。お互いに住む場所や言葉の違いはあるが、それらを超えた人間同士の付き合いの広がりやと思うと、もったいないと内心感じるところもある。しかし、この“横浜日独協会”にはいろいろな思いをつなぎ、日本に居ながら国境を越えたヒューマンリレーションを暖かく内包する性格が潮流としてあるのかもしれない。

行事予定

■10月例会；

- <設立4周年記念・ドイツ大使歓迎パーティー>
- ・日時；10月16日（木）午後2時～5時
- ・会場；メルパルク7階「Bohyoh」の間（Tel:661-8155）中区山下町16地下鉄中華街駅5番（マリインタワー隣）
- ・主賓； フォン・ヴェアテルンドイツ大使 及び 林文字横浜市長（又は渡辺巧教副市長）
- ・会費； 5,000円

■11月例会；

- ・日時；11月15日（土）午後3時～5時
- ・会場；戸塚区民文化センター4階創作室（戸塚駅西口前）
- ・講演と試食会； 早瀬慶子氏 『心をつなぐおもてなし内外での経験を通して』
- ・会費； 1,000円 懇親会500円

■12月 クリスマス／忘年会

- ・日時；12月13日（土）午後1時半～4時（受付1時）
- ・会場；イタリアン パパダビデ（Tel:045-650-7080）みなとみらい線 元町・中華街駅4番出口
- ・会費；5,500円

コンサート案内；

- <大島富士子会員 ソプラノリサイタル>
- ・日時；11月22日（土）開演13:30（開場13時）
- ・会場；横浜みなとみらい小ホール
- ・チケット； 一般4000円・学生3000円

編集後記；

・今回号より新連載として「私のドイツでの思い出」をスタートしました。初回の御寄稿を南雲 淑子理事にお願いし快くお引き受け頂き有り難うございました。会員みなさんのドイツでの思い出話しをご披露して頂く楽しい紙面にしたいと思っていますので、奮ってご参加くださいますようお願い致します。（向井）

・今回は、様々な記事が集まってレイアウトに苦労しましたが、読み応えのある会報になったのでは…（山口）

新入会員；

- ・廣岡 奈々子様（ひろおか ななこ）
- ・谷山 定司様（たにやま じょうじ）
- ・秋山 千春様（あきやま ちはる）
- ・堀川 尚 様（ほりかわ たかし）

横浜日独協会会報

発行 2014.10.1（第23号）

事務局；〒223-0058 横浜市港北区新吉田東2-2-1-913

能登 崇 方

Tel & Fax: 045-546-0801, e-Mail: tak_noto@yahoo.co.jp

会報編集責任者 向井稔 編集委員 山口 利由子

e-Mail : botmukai@bird.ocn.ne.jp

横浜日独協会ホームページ

URL:<http://jdyg.sub.jp/index.html>

法人会員

株式会社文芸社 ウィンクレル株式会社 ボッシュ株式会社 フェリス女学院大学
トルンプ株式会社 モトスミ・プレーメン通り商店街振興組合 株式会社テレビ神奈川
公益財団法人登戸学寮 株式会社コトブキ